

エッセイ

認知症患者の家族に対する介護環境改善の処方箋作り

清家 理 (こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)
Aya SEIKE

日本は、他国以上に超高齢化が進んでおり、その中で認知症を持つ人が推計400万人と言われている。今、日本の各地で認知症を持つ人を支える取り組みが進行中である。私は、研究を実施する立場では「まだまだ派」だが、認知症を持つ人の家族当事者としては「ずいぶん進んだ派」である。どっちつかずの見解だが、ここで少しでも自己紹介をさせていただきたい。

私は、医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）14年選手であった。仕事内容は、患者さんや家族さんの「生きづらさ」に関する、よろず相談。現場上がりの研究者である。現在、私の研究は、大きく2つのテーマがある。1つは、認知症を持つ人を介護されている方々の「こころと身体」を支える上で、何が、どの部分で、どれだけ必要なのか、介護者や彼らを支援する人たち双方が一目で分かる「ものさし」の開発である。もう1つは、自分の意思がはっきり示せなくなってしまった時の備え……。たとえば、医療処置、介護、財産のことをどうしてもらいたいのか、誰に代わって決めてほしいかといったことを常々から考えておく、「道しるべ」の開発である。

MSWになったこと、2つの研究をすること、いずれも認知症の祖父母に対する後悔が発端であった。まず高校時代、認知症の祖父に対する恐怖感から、同居の継続を拒否した。その頃、今のように介護保険制度もなく、家族がケアを担うこ

とが当然の状態であった。祖父は裸で外を徘徊し、夜は冷蔵庫の中をひっかきまわす、いわば認知症の周辺症状がひどい状態であった。地域では「気の毒ね」「気がふれたの?!」と言われ、次第に祖父を家に閉じ込めてしまった。この時分は、家族も地域住民も、認知症を持つ人を理解し、受け入れる土台（環境）が今以上になかったとは言え、大きな後悔の念を抱く出来事であった。

そして、MSW7年選手の頃、89歳の祖母が認知症になり、徘徊中の転倒で大腿骨を骨折した。実母の骨を元に戻したい整形外科医の叔父は手術に踏み切り、結局、糖尿病が影響し、術後の合併症で腎臓を悪くしてしまった。いつの間にか、叔父の判断で透析が始まった。そしてさらに病状が悪化した時、人工呼吸器の装着をどうするかで意見が二分した。祖母の本当の願いは、一体何だったのだろう……。もし話していたとしても、認知症の人の思いはどこまで尊重されたのだろう……。そんな堂々巡りを繰り返しながらのお葬式が、6年経った今でも忘れられない。

そんな苦い経験もあり、現在の研

究に至ったのだが、ここ2年ほど、認知症介護者の家族教室にも関わっている。そこでは、「介護者の心身を整える」「専門家に物申せる力をつける」をキーワードに、介護者と介護を必要としている人（以下、要介護者）を中心とした、人・物つながりマップを作成する取り組みを実施している。マップに描く「つながりの範囲」について、「地域」の捉え方（表1）を用い、各自が設定している。つながりの強さや心理的な距離感を線で表現し、「私、地域で独りじゃない！」等、新たな発見をしたり、少し弱い部分を見つけて対策を立てる取り組み～処方箋作り～を実施している。自分と要介護者、その家族の小さなつながりだけではなく、介護をしながら、自分がどんな人や物と、どのようにつながって地域で生きているのか、広い意味で自分が生きている環境を客観的に把握することが、介護者のこころと身体を健全に保つ1つの手段になればと思っている。ローマは一日にしてならず……で、介護者の方々と共に実践と検証研究を継続中である。

表1 介護者を中心に見た地域の捉え方

単位：「コミュニティの大きさ」=最小レベル（家庭）→最大レベル（国家、国外・世界）へ拡大

単位	人・機関所属者
最小 家庭（住んでいる家）	家族、親戚、血縁関係にある人
住んでいる家から徒歩圏内（町内）	隣人、店や寺社関係、自治会
支援を受けることでできたつながり	ケアマネジャー、主治医、看護師、在宅サービス専門職
住んでいる家の行政単位（町・村→市→県）	制度や税金関係の窓口担当者、家庭裁判所書記官、リーガルサポート関係者
個人の社会的活動でできたつながり	仕事関係者、娯楽の友人、同じ経験を有する仲間、SNS フォロワー同志
国（都道府県に権限移譲される制度枠組み）	官僚、議員
大 国外	